

資質・能力の育成に向けたカリキュラム・マネジメントの推進 ～「伝え合う活動」を軸に～

八千代市立村上中学校

1 はじめに

変化が激しく予測困難な未来社会を力強く生き抜くには、知識・技能（コンテンツ）の習得のみならず、解のない課題にも他者と協働して解決する力や、持続可能な社会を築いていこうとする態度など、資質・能力（コンピテンシー）の育成が求められている。

それらの育成には、各教科での「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業改善が必要である。同時に育成を目指す資質・能力を明確にし、教員同士が共有し、教科横断的に取り組むことや、学校の内外を問わず、様々な活動や資源と繋げること、計画・実施・評価・改善を絶えず行う等、カリキュラム・マネジメントの視点を持った取組も必要になる。

2 研究の概要

(1) 研究主題について

本校は八千代市の村上団地に位置する。生徒の大半が隣接する村上小学校から入学するため、人間関係が固定されがちである。社会で活躍する以前に、様々な人々とのコミュニケーションを通じ、その力をつけていきたい。

本校の研究主題は以下に掲げる通りである。

「自ら考え、互いに学び合える生徒の育成」
－ 伝え合う活動を通して －

「自ら考え、互いに学び合える生徒の育成」を端的に言えば「主体的・協働的（対話的）に取り組める生徒の育成」である。その手立てを「伝え合う活動」とし、授業やあらゆる活動において意識すべきキーワードとした。

(2) 「伝え合う活動」で目指す資質・能力

「伝え合う活動」は、いわば「コミュニケーション活動」である。本校ではこれを「出あい」「ふれあい」「かかわりあい」という表現で子供たちに示している。知識や技能

の習得にとどめず、コミュニケーションを図ることを通して思考力が高まり、また協働することにより新たな価値の創造も期待できる。



3 主な取組

(1) 教科横断的な取組

新学習指導要領は、各教科の指導内容は、それぞれの教科によるところとし、思考力や表現力等の汎用的な資質・能力については、各教科の「見方」「考え方」等で示し、それを軸にどの教科でも育成することを求めている。その手立てとして「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業改善を謳っている。

本校では、①練られた「問い」を発する場面、②「協働（対話）」する場面、③「振り返る」場面の3つの要素を授業の中に設けていこうと取り組んでいる。特に②「協働（対話）」する場面に焦点を置き、「伝え合う活動」とし、それを軸に全ての教科において横断的に取り組むことに努めている。

(2) 学校の教育活動全体を繋ぐ取組

本校の「伝え合う活動」は、以前から様々な場面や活動で姿を現していた。合唱コンクールは学級の仲間同士の、体育祭（グラウンド祭）は異学年との「伝え合う活動」である。また生徒集会で頻繁に行っている合唱も同様である。要は各教科の授業のみで資質・能力の育成を目指すのではなく、あらゆる場面や活動と繋いでいくということ

である。



(3)校外の人材や資源と繋ぐ取組

資質・能力の育成に向けた「伝え合う活動」は、校内にとどめない。地域の学校、地域の団体や職場の人々とも繋ぎ、「出あい」「ふれあい」「かかわりあい」を推進していった。

①小学生（村上小学校）と繋ぐ

市の総合体育祭に出場する本校の生徒に、声援を送るために、小学生がかけつけた。



②同じ地域で暮らす人々と

地域の防災訓練（炊き出し）に、本校生徒も加わり、地域の人々と取り組んだ。



③環境の異なる地域の人々と

本校では1年生で新潟県十日町市の民家に宿泊し、雪国の人々に「出あい」そして「ふれあい」、さらに3年生の修学旅行で、同じ民家を訪れて、「かかわりあい」を深めている。



4 校内研修も「伝え合う活動」で

『『伝え合う活動』は教師から』が、本校の校内研修の基本である。そもそも教師が体感していないことを子供に求めるには無理がある。研修内容と併せ、教師同士が協働し、課題を解決していける手立てを求めたところ、「参加・体験型研修手法」にたどり着いた。



(1)育成に向けた計画・実施・評価・改善

KJ法[®]的な手法やベン図等を用い、育成を目指す資質・能力を出し合い、目標を共有した。マトリックス等の手法を用い、取り組む時期、場面を整理し、達成に向けた計画を立案した。今後は達成状況を評価し、改善を加え、P D C Aサイクルを回していきたい。

(2)校内研修の成果

このような研修の成果は以下の通りである。

- ①経験年数が異なる教員間の認識の差が縮まり、目標や課題を共有できるようになった。
- ②参加・体験型（ワークショップ型や思考ツール）の手法を実際に体験し、それを授業で応用するなど、授業改善にも生かされた。
- ③教員間の同僚性、協働性が高まってきていることが、何よりも成果である。校内研修に限らず、様々な場面で活用していきたい。

5 まとめ

本校のカリキュラム・マネジメントの視点での取組は、子供たちの資質・能力の向上に功を奏しているのだろうか。全国学力・学習状況調査の結果や学校評価の結果、その他の情報を分析し、今後まとめていきたいと考えている。